

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1 志登遺跡群と宮廻遺跡

志登遺跡群は、雷山川下流の標高3～6mほどの低地帯中の微高地に立地する集落遺跡である。大字「志登」は、雷山川をまたいで東西1,600m、南北1.2kmの広範囲を指す地名で、西に隣接する大字「潤」と雷山川を挟んで南北約1kmに及ぶ大字境を有している。

この地域は、江戸時代の初め頃までは西の加布里方面から入り組んだ内海の最深部にあたり、一帯の海浜部には潟状の内海が広がっていたと考えられる。また東に目を転じれば博多湾から深く湾入した古の今津湾が志登集落の北東部まで迫り、東西から海が迫る地峡帯に位置していたことが、絵図に記されている（註1）。

また、同時に一帯は雷山川の河口に位置していたことも絵図から読み取ることができ、伊都国の内外との水運の要衝に位置していたことが想定された。

しかし、その一方で、志登遺跡群内での考古学的な調査は、さほど進んでおらず、遺跡の詳細な範囲、構造や時期的な変遷などについては、今後の調査の進展に委ねなければならない。

今回、報告する宮廻遺跡は、雷山川右岸の標高4～5mほどの微高地上に立地する。昭和56年度に行われた泊地区県営圃場整備事業において圃場面の切り下げによって、残存遺構が破壊されることが予測されたため、緊急に発掘調査が実施された。

当該年度末には、「志登遺跡群A地点」（註2以下『概報』）として概要が報告されたが、遺物については未報告となっていた。しかし、当該地域の弥生～古墳時代の集落動態や海岸線を復元する上で基本的な資料となると考えられたため、既に報告された遺構図とともに本紀要で紹介する。

なお、調査地点は、志登神社の北西に隣接するが、当該神社は『延喜式』に記載された式内社であることから、「志登」の名が遅くとも平安時代初期には成立していたことになり、当該地有数の古地名であること、また、その歴史的な位置づけの

重要性をうかがわせる。

また、『概報』では「A地点」と記されているが、小字が「宮廻」（ミヤマワリ）であることが確認された。遺跡の地理的、歴史的環境を明らかにするには、この小字を遺跡名に冠したほうがより望ましいと考えられるため、今後は「志登宮廻遺跡」に改めることとしたい。

2 調査の成果

(1) 調査区の概要（第1図、図版1）

調査地点では、あらかじめ調査対象地に東西、南北方向のトレンチが十字に設定され、遺構、遺物の有無について確認が行われており、その際、弥生中期～古墳前期の土器が出土している。

東部のトレンチでは溝等が検出されたことから、その南側に新たに東西12m、南北20mの長方形の調査区を設定して発掘調査が行われた。

なお、新たに設定した調査区では、北西部が一段深くなっており、住居跡は確認されなかったものの、中央から南部にかけては、弥生後期～古墳前期の竪穴住居が幾重にも切り合った状態で検出された。

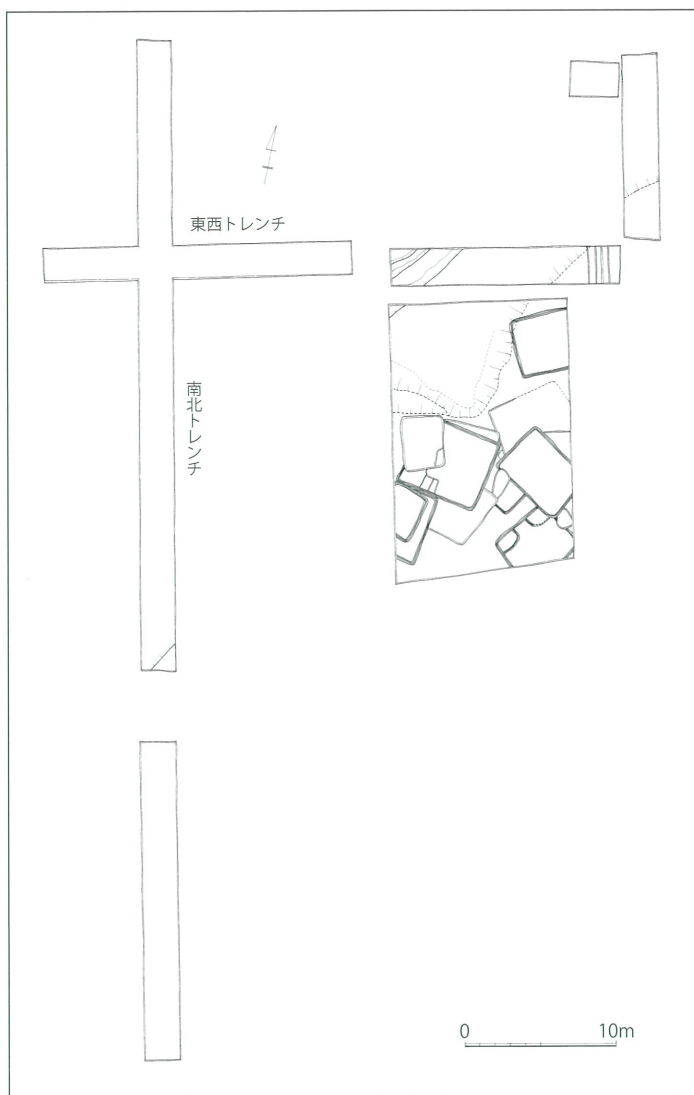
(2) 遺構各説

竪穴住居（第2、3図、巻頭図版1、2）

12棟の竪穴住居跡が検出された。弥生時代後期の2棟（4、10号）、弥生終末～古墳前期に属するとみられる4棟（7、8、11、12号住居）、古墳前期に属する6棟（1、2、3、5、6、9号住居）が報告されている。

弥生後期の住居跡は後世の深い削平を受けて、床面がかろうじて残存する程度であった。また、遺構の切り合いも激しく、調査区外に広がるものもあったため、遺構の規格や構造を詳細に把握できるものは少なかった。

各住居跡の実測図は前報告書に報告されているので、第3図にまとめて掲載し、それぞれの計測値、観察内容等には表1に、切り合い関係から想定される遺構の前後関係について表2に記載して

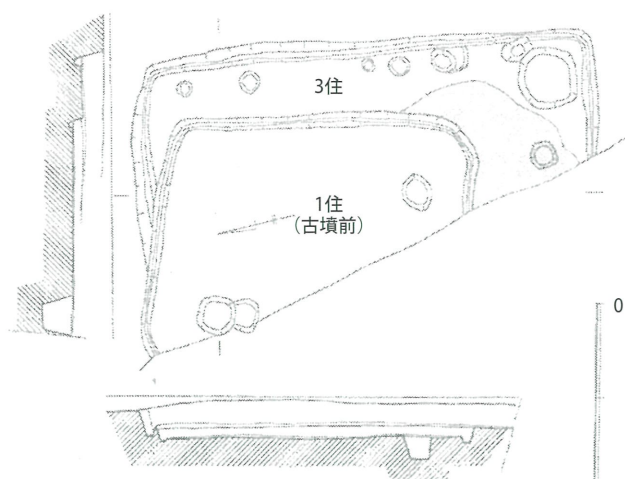


定田集落内で発見された
環状墓 (1953年松岡史氏提供)

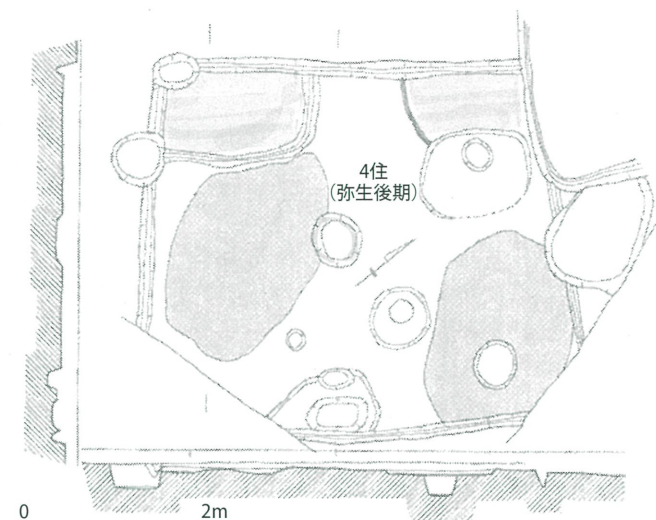
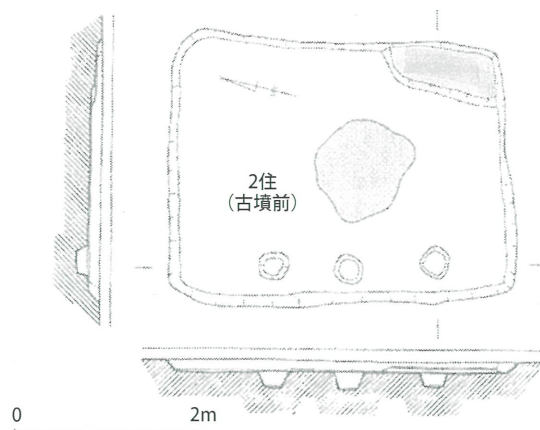
第1図 志登宮廻遺跡の位置 (1/4,000 1983年当時) と調査区の設定状況 (1/500)



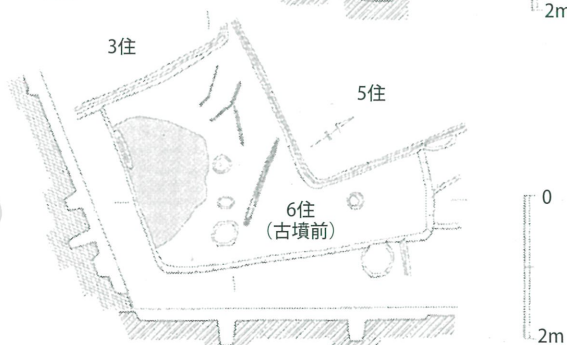
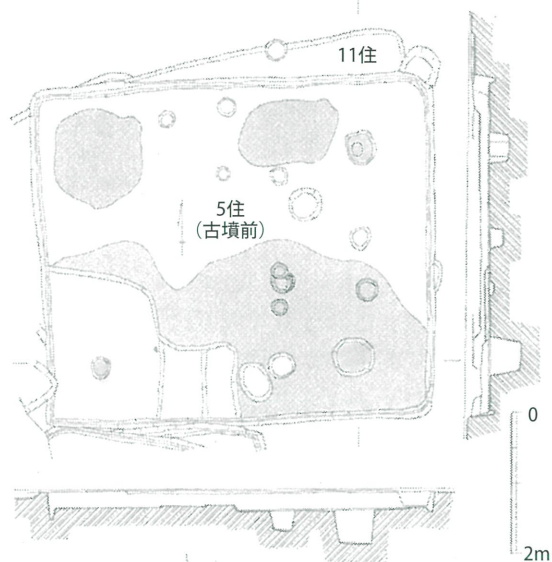
第2図 志登宮廻遺跡の遺構配置図 (1/120)



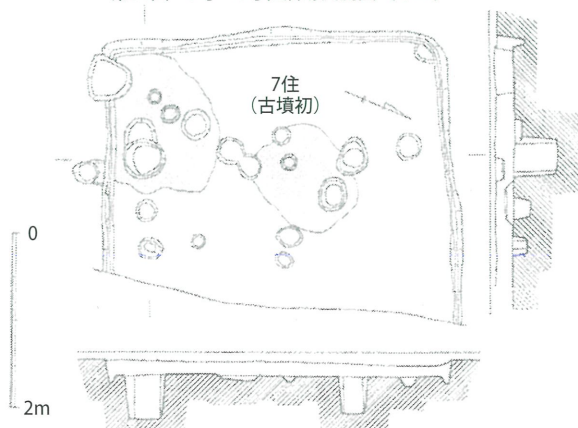
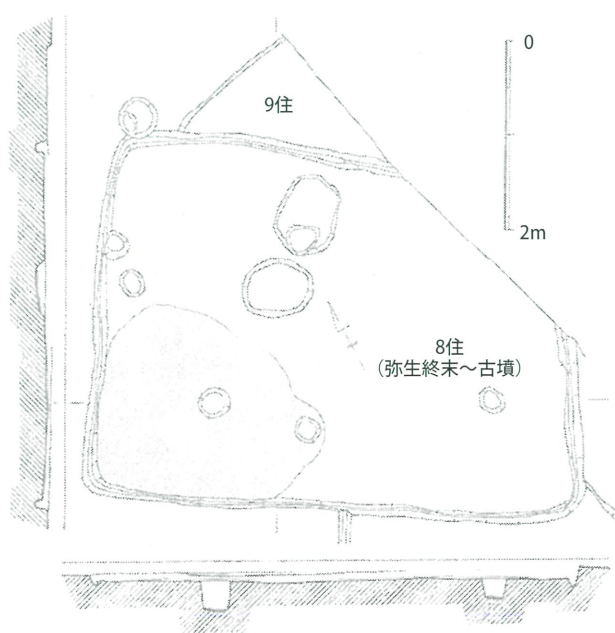
第29図 1号・3号住居跡実測図 (1/60)



第30図 2号・4号住居跡実測図 (1/60)



第31図 5号・6号住居跡実測図 (1/60)



第32図 7号・8号・9号住居跡実測図 (1/60)

第3図 志登宮廻遺跡の竪穴住居跡実測図 (1/100 註2報告書から転載)

いる。

弥生時代後期の4号住居跡は、保存状態が比較的良好で大要を把握できる。南西壁に比べて北東壁が若干短い長方形プランで北東壁の両隅角に長方形のベッド状遺構が削り出されており、中央から少し東寄りに炉とみられる小土壇が掘り込まれていた。

古墳時代前期の住居の屋内主柱の配置は不鮮明であるが、残存状態が良好に遺存していた5号住居跡は4本主柱とみられるものの、北西柱が未確認であった。

古墳前期の住居跡は布留式中段階の5, 7, 9号住居で最大面積となるものの、新段階となる1, 2号住居跡では小型化の傾向を示す。時期的な変遷に伴う住居構造の変化によるものか、当該集落の衰勢に関連する現象であるのか興味惹かれるところである。

また、住居跡の床面では作り付けカマドは確認されておらず、出土土器に甑が認められないことと併せてカマドが敷設されていなかったものと推定される。

出土土器（第4図、巻頭図版2） 土器の出土総量は少ないが、1, 9号住居跡から数点まとまって出土している。

1号住居から出土した甕は胴部が球形を呈し、外面は縦ハケ、内面は下部をハケ、中位から上はケズリ調整を施すが、器壁は全体的に厚い。

これに対し9号住居跡出土の甕は、胴部は器壁が薄くなるまでケズリ取られ、古式の様相を示す。

高坏は、1号住居跡のものを3点図示したが、いずれも坏部は深めであるのに対し、9号住居跡から出土した15は坏部が浅めで、同種のものとしては新しい様相を見せる。

11は、5号住居から出土した鼓形器台片である。クビレ部につくり出された三角突帯は稜が丸みを帯び鈍くなっている、3～5よりも新しい様相を示すものといえる。

土壇（第6図）

4基の土壇が報告されており、いずれも古墳時代前期とされている。このうち4号土壇（第4図）は長楕円形プランで長さ140cmで、幅96cm、深さ18cmの浅い土壇である。古式土師器がまと

番号	平面形	床面深さ (cm)	主軸長	幅	時期	備 考
1	長方形	32	338	250+	古墳前期	土器がまとまって出土
2	長方形	12	364	277	古墳前期	床面中央に焼土 南東隅角にベッド状遺構
3	長方形	25	488	300+	古墳前期	
4	長方形	8	404	470	弥生後期	北西壁2隅にベッド状遺構
5	方形	26	571	493	古墳前期	
6	長方形	10	428	302+	古墳前期	南壁際に焼土
7	方形	10	518	388	弥生～古墳	西角隅に焼土・炭化物
8	方形	5	—	—	弥生～古墳	
9	方形	20	394	320	古墳前期	中央と南壁際に焼土 土器がまとまって出土
10	方形	5	—	—	弥生後期	南隅角壁のみ残存
11	方形	5	450+	—	弥生～古墳	5号に切られ北壁のみ残存
12	方形	3	—	—	弥生～古墳	北西隅角壁のみ残存

表1 志登宮廻遺跡住居跡計測値一覧

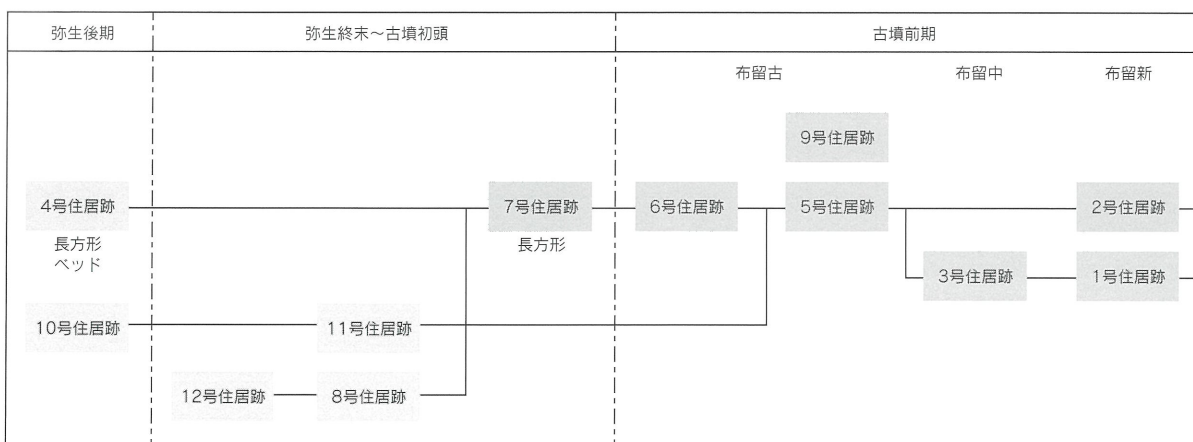


表2 志登宮廻遺跡における竪穴住居の前後関係

まって出土している。

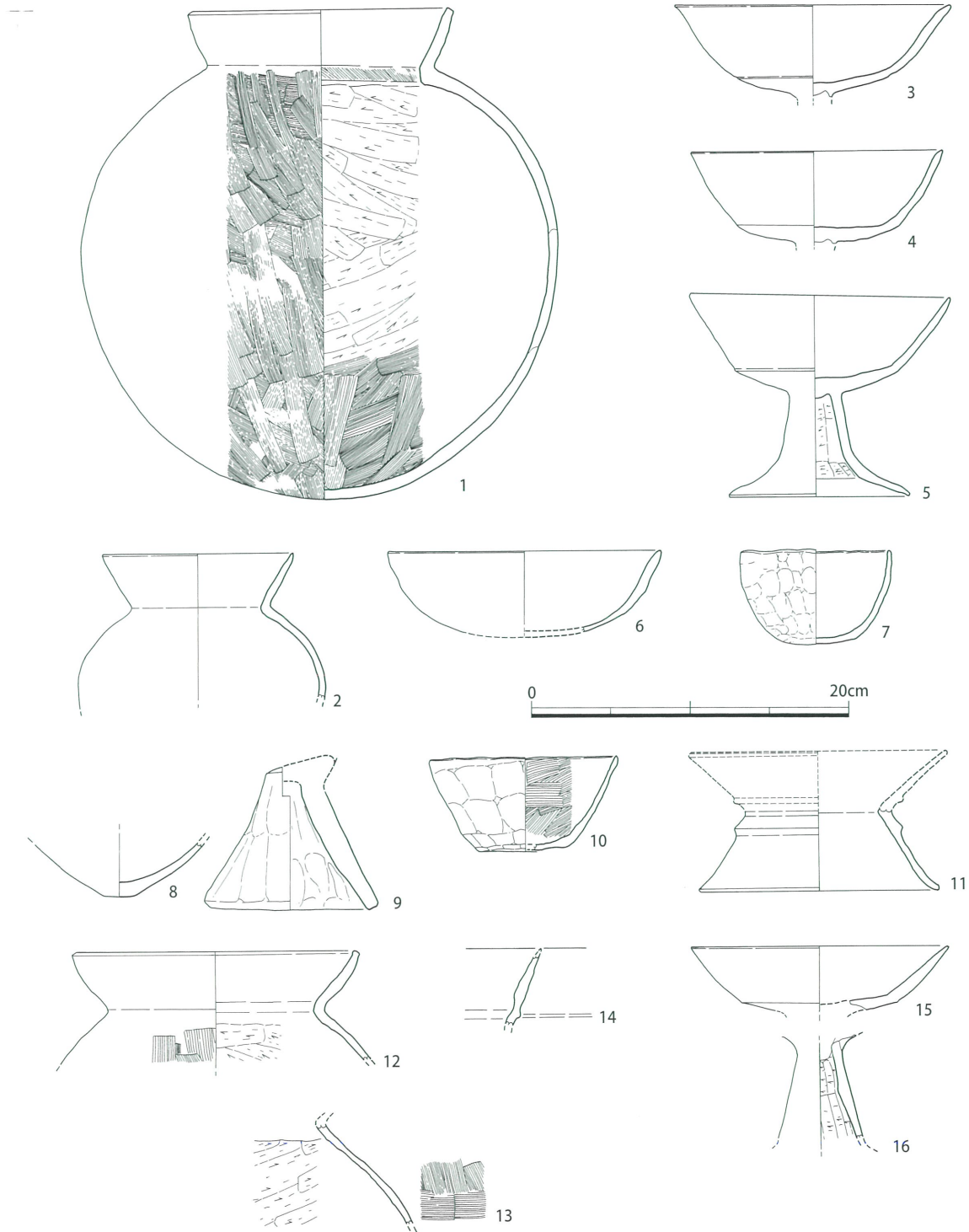
出土土器（第5図17～21,巻頭図版2） 17は、甕である口縁部は直立気味に立つ。18は、扁球状の胴部から口頸部が直立する。19の坏は底部が平底で、口縁部は小さく如意状に開く。

20は堦でも丸底から横に大きく直線的に広がる。

21は、高坏で、坏部は外に緩やかに広がる。

トレンチ出土遺物（第5図 巻頭図版2）

調査K起点となった東西方向、南北方向に設定されたトレンチからも弥生土器、古式土師器、石



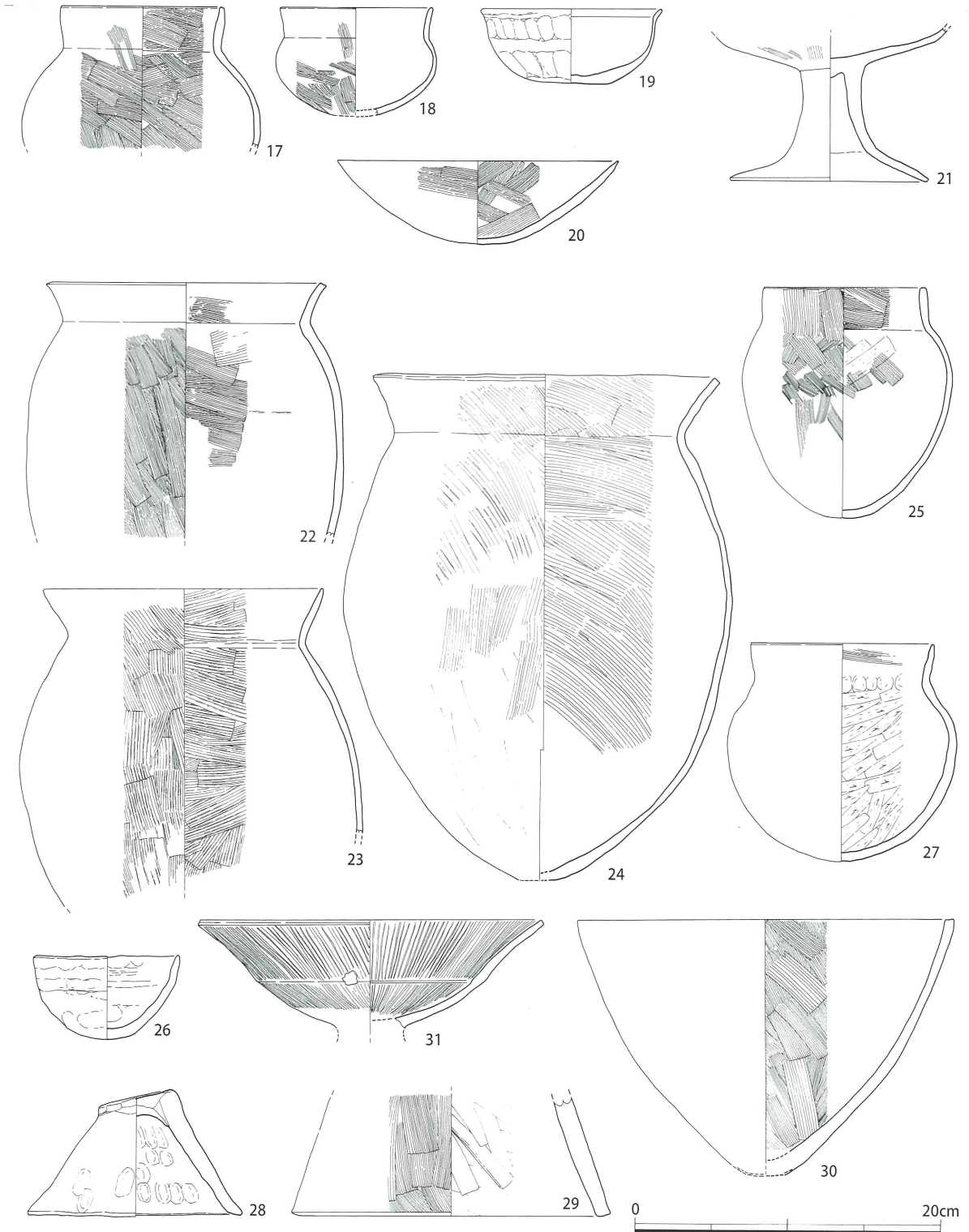
第4図 志登宮廻遺跡出土土器実測図① (1/4)

器などが出土している。弥生後期～古墳前期の土器に保存状態が良好のものがあるが、土器溜りを想定させるほどの量ではないので、これらの出土状況は不明といわざるをえない。

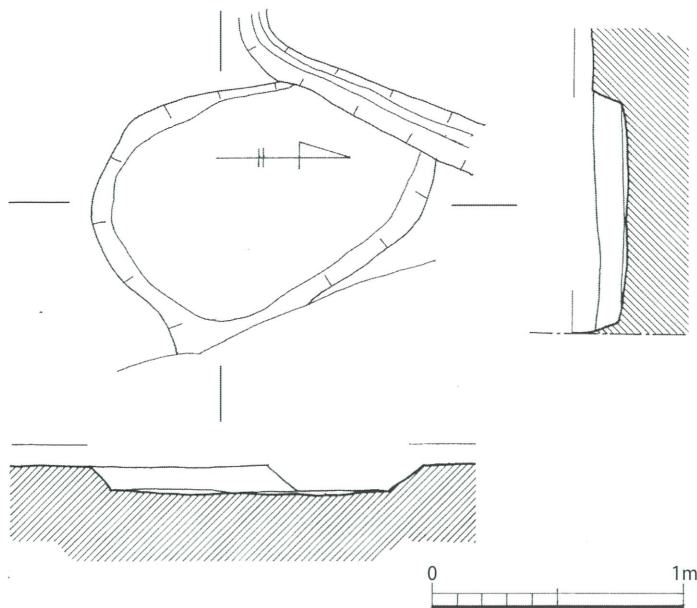
当該地点において、時期が絞り込めない住居跡

等もあるため、これらの時期を推定する上でも参考となるので図化掲載した。

土器 (第5図22～30) 22～24は中型甕である。砲弾形の胴部を有し、口縁部は直立気味なものと大きく外に広がるものが混在する。調整は、内外



第5図 志登宮廻遺跡出土土器実測図② (1/4)



第6図 4号土壌実測図 (1/30)

面とも縦、ナナメハケで仕上げており、底部が残存する24では、下部は強い縦方向の板状工具によるナデが確認された。底部はわずかであるが平底を呈する。弥生終末期に属すると考えられる。

25、26は小型甕で25は、口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。27は、胴部が球形で内面はヘラケズリで仕上げる。古墳前期前半に属する。

28は支脚で、29は大型器台の脚裾編である。いずれも弥生終末に属する。

30は尖底の大型鉢である。外面は縦方向の板ナデ、内面はタテハケで仕上げる。弥生終末の資料であろう。

31は、住居跡から出土した高坏月部であるが、帰属が負傷となっていたため、ここで追加報告した。内外面とも縦方向に暗文状に研磨が施されて

おり古墳初頭の資料と考える。

石器 (第7図, 図版2) 濃黒灰色の片岩系石材を用いた石製品である。幅は図の上部で10.5cm、下部で10.8cmを測り、やや下に向かって広がる縦長の板状を呈する。現存長は中央部で8.1cmを測り両端が破損欠失しているため全形を把握できない。

加工の特徴としては、実測図の表面と両側縁は擦過研磨によって平滑になるよう丁寧に面取りが施されているが、裏面は凹凸面を均す程度の軽い擦過が施される程度でとどまり、他の面とは加工の程度が異なることが上げられる。

また、厚さは均一に1.9cmほどを測るが、図の中ほどから下方にかけて中央部分が0.5mmほどゆるやかに窪んでおり、使用による片減りではないかと考えられる。また、この面にのみ黒褐色の薄い付着物が観察される。

3 調査の所見

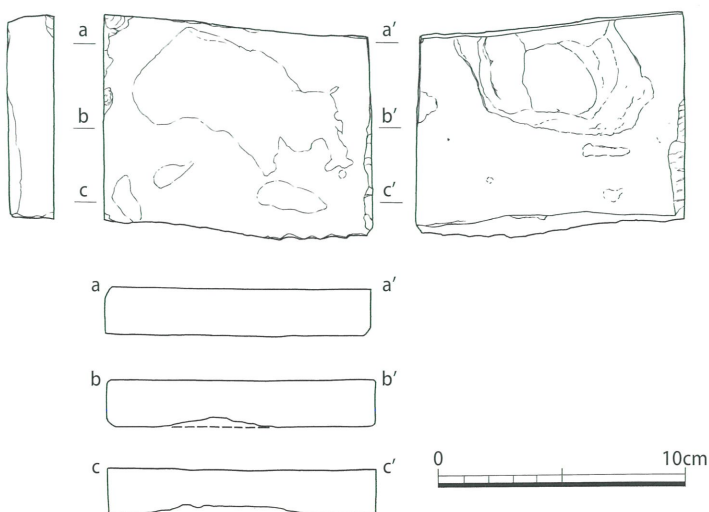
調査範囲は極めて狭く限定的であったが、志登神社の北西低地部で弥生後期～古墳前期の竪穴住居群を含む集落の一部を確認できたことは、一帯における当該時期の地形環境と土地利用状況を検討する上で大きな成果となった。

調査地点では、弥生後期後半～古墳前期中頃まで集落が継続して営まれていたことがうかがわれ、潤地頭給遺跡における集落の存続期間と一致しており、潤～志登にかけての一帯広範囲に政治的に安定した集落(地域)運営が展開されたことをうかがわせる。

さて、この地域の歴史を検討する上で、糸島低地帯と呼ばれる(註3)一帯の低平地の古地形の検証は大きな意味を持つ。特に志登～泊間の標高5m以下の地域は、古くは海水面下に水没し、糸島半島と本土の間に海峡(水道)が存在したとする説(註4)が広く支持されていた。

低地帯に周辺にみられる水に困んだ地名や、縄文時代後期に糸島半島南東部の丘陵裾に形成された元岡瓜尾貝塚、桑原飛櫛貝塚等の貝塚の立地がこれを裏付けるというものであった。

しかし、1984(昭和59)年に下山正一氏を中心に行われた一帯の地下試錐調



第7図 出土石器実測図 (1/3)

査によって、海成層が分布するのは現標高2.5m以下の地層に限られることが確認され、これより標高が高い地点では遅くとも縄文時代後期以後には陸化が達成されていた可能性が高く、これらのことから、泊と志登を結ぶ東西幅500mの範囲については怡土と志摩を結ぶ地峡が存在したとする新たな見解（註5）が示された（第8図）。

その後、橋口達也氏は、『新修志摩町誌』において、糸島地方臨海部の弥生時代の集落遺跡を個別に詳細に検討することで、下山説を追認しながら、「川幅程度の狭い部分が満潮時に両地域を隔てていた可能性」を追い、「シマ」という名称の語源として地形的に分断された「島」の存在した可能性にわずかな望みを託して考察の締めとする（註6）など論議は続いている。

今回報告した志登宮廻遺跡の遺構面の現標高は概ね4.0mほどである。また、堅穴住居の床面の高さは最も低い1号住居跡でも概ね3.5mほどを測り、近隣の潤丸田遺跡の1号住居跡の床面標高もほぼ同じ数値を指している（註7）ことから、現標高3.5mレベル以上については古墳時代前期以後は安定した生活面として利用が可能であったと考えることができる。この標高は下山氏が想定している海成層の形成上限標高よりも1mほど高

く、通常の生活が可能な標高の範疇ととらえてよいだろう。これらの状況から、下山が想定したように泊～志登間に地峡が存在した可能性はより高くなったことになる。

志登神社の北東部にある定田集落では、志登支石墓群の調査（1953年）中に弥生中期の小児用甕棺が出土したことが報告されている（註8）。定田地区の標高は3.0mほどであることから、志登宮廻遺跡よりもさらに標高の低い地点でも、弥生時代の遺構が発見される可能性がある。

ちなみに、近在の潤地頭給遺跡では、標高2.3メートル地点でも弥生時代中期の土器溜りが検出されており（註9）、弥生時代以後では、下山が想定した2.5mよりさらに低い地点まで陸化が進んでいた可能性も出てきた。

今後、周辺での調査例の増加することで古代における古地形と集落の動態の検証がさらに進むものと期待される。

トレンチから出土した板状石製品について、伴出した土器から弥生時代終末～古墳時代前期の資料と考えられる。

当該時期の類似する石製品として、楽浪系石製硯が注目を集めている。薄い石板の裏面が剥離後ほとんど未調整のまま使用されているのが特徴

番号	遺構等	器 種	口縁径 (cm)	高さ (cm)	胎 土	色 調	焼 成	博物館 台帳番号	備 考
1	1号住	甕	16.7	30.7	砂粒を含む	明褐色	堅緻	10609	胴部最大径30.0cm
2		壺	12.0		砂粒を含む	灰褐色	やや軟	10624	
3		高杯	16.6	12.6	砂粒を含む	明赤褐色	精緻	10625	脚裾径11.4cm
4		高杯	15.9		砂粒少量	灰褐色	良好	10622	
5		高杯	17.5		砂粒少量	赤褐色	良好	10625	
6		碗	17.2		砂粒を含む	明褐色	良好	10627	
7		碗	9.4	5.9	精緻	灰褐色	堅緻	10628	
8	4号住	壺		-	砂粒なし	灰褐色	精緻	18005	底径2.0cm
9		器台			砂粒を含む	乳褐色	やや軟質	10621	
10	4.5.6号住	鉢	11.9	5.8	精緻	暗褐色	良好	10629	
11		器台			砂粒を含む	乳褐色	良好	10630	
12	6号住	甕	13.2		砂粒を含む	乳褐色	良好	18006	
13	9号住	甕			砂粒を含む	乳褐色	良好	19013	
14		二重口縁壺			砂粒を含む	乳白色	やや軟質	-	
15		高杯	16.4		砂粒少量	乳褐色	やや軟質	19016	
16		高杯			砂粒少量	明橙褐色	やや軟質	19015	
17	東土壇	直口壺	10.8		砂粒少量	暗褐色	良好	10634	
18		直口壺	10.1	7.1	精緻	暗赤褐色	良好	10633	胴部最大径10.5cm
19		碗	11.9	4.9	砂粒少量	黄褐色	良好	10631	
20		碗	18.4	5.5	砂粒が多い	暗褐色	軟質	10632	
21		高杯	-		砂粒少量	橙褐色	良好	19012	脚裾径17.6cm
22		甕	18.4		砂粒が多い	淡茶褐色	良好	18007	3層 胴部最大径20.7cm
23	トレンチ (東西方向)	甕	18.3		砂粒を含む	黄褐色	軟質	10612	4層
24		甕	22.2		砂粒が多い	明茶褐色	良好	10611	4層
25		甕	10.6		砂粒を含む	暗褐色	良好	10613	3層
26		碗			砂粒少量	茶褐色	良好	10635	4層
27	トレンチ (南北方向)	直口壺	11.9	14.2	砂粒を含む	黒褐色	やや軟	10636	胴部最大径14.9cm
28		支脚			砂粒が多い		軟質	19010	
29		大型器台	20.9	16.8	砂粒を含む	赤褐色	良好		
30	1・2号住	鉢			砂粒が多い	橙褐色	軟質	19014	
31		高杯	22.5		精緻	明赤褐色	良好	10623	

第3表 志登宮廻遺跡出土土器観察表

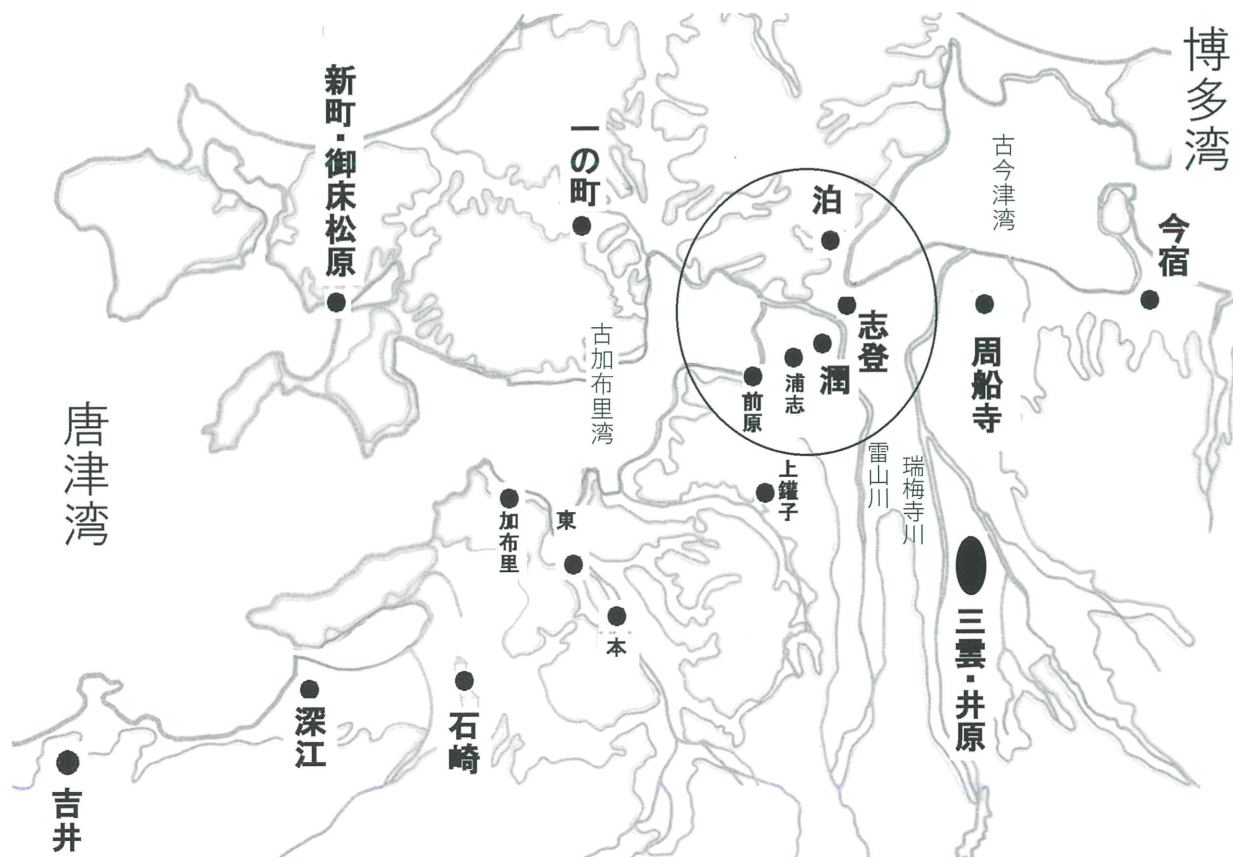
で、三雲番上遺跡から相次いで出土した（註10）が、当該資料と比較すると三雲の石製硯は厚さは6mm程度と極めて薄く仕上げられている点が大きく異なる。黒色の付着物の存在が気になるが、当該資料をもってその可否を判断することは難しく、今後の類例の増加による比較検証を待ちたい。

註

1. 「慶長筑前国絵図」『福岡県史資料』第2輯附録1933 福岡県
2. 川村博『昭和56年度埋蔵文化財調査概要』1981 前原町教育委員会
3. 下山正一他「福岡県糸島平野の第四系」『北九州市立大学文学部紀要[B]』1984 北九州大学
4. 山崎光夫「北九州の先史時代以降の海岸線の移動」『九州大学教養部研報報告(1)』1955 九州大学教養部地学教室

樗木昇一「糸島平野の地形発達史一特に糸島水道を中心として」『糸高文林(6)』1958 糸島高校

5. 下山正一「糸島低地帯における完新統期における貝化石集団」九州大学理学部紀要1984
6. 橋口達也「志摩地域は弥生時代には島であったか」『新修志摩町史』2009年
7. 平尾和久「潤丸田遺跡」『潤遺跡群Ⅰ』2014 糸島市教育委員会
8. 斉藤忠『志登支石墓群』1955 文化財保護委員会
甕棺墓の写真は本紙2頁第1図右上に掲載
9. 江野道和『潤地頭給遺跡Ⅱ』2007前原市教育委員会
10. 2015年の調査で出土。現在、資料の整理中。



第8図 糸島半島基部における古代の海岸線と主要な弥生～古墳時代集落遺跡の分布